

中学校 国語科 学習指導案

日時 平成 29 年 10 月 14 日(土) 第 2 限 10:35～11:25

場所

学年・組

単元 語る意味を考える

教材 「故郷」(魯迅) 「中学校 国語 3」学校図書

- 目標
1. 情景や人物の描写をとらえ、作品世界を読み取る。
 2. 登場人物の役割を考える。
 3. 語られたことについて考え、自分のものの見方・考え方を深める。

指導計画 (全 6 時間)

- 第一次 全文を通読し、印象に残った点、考えた点、疑問点をカードに書く。 1 時間
- 第二次 グループで問いを立て、検討する。資料を作成し、発表する。 3 時間
- 第三次 「私」にとっての「故郷」はどんなものか考え、「希望」を語る意味を考える。
1 時間 (本時)
- 第四次 若い世代と自分たちを対比させ、語られたことを自分と照らし合わせて考える。
1 時間

授業について

学習指導要領が改訂され、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層育成することが求められている。国語科では昨年から「『学びの質』を高めるために」というテーマを掲げ、「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」の実現を目指している。これらは作品を読んでいく中で、自己と対話し自分の考えを持ちながら、相互で話し合い議論し、より一層考えを深化させることによって可能になるであろう。「深い学び」から得た考えあるいは考え方を持つことは、今後生徒が社会と連携・協働しながら未来の創り手となる力の育成につながるのではないかと。授業の中で、そのような学習過程を設定し、さまざまな視点から作品を主体的に読み、交流を図ることで、学びが深まることをめざしたい。

魯迅の「故郷」は一九二一年、月刊総合誌『新青年』に発表された短編小説である。当時の中国は「辛亥革命」によって大帝国清朝が崩壊し、新しい中華民国が生まれたものの、革命は失敗し、再び混迷した社会情勢であった。魯迅はこの国づくりの苦難な道を自分の思想形成の戦いの場としても生き抜いた作家である。「故郷」は儒教的環境の中で未来という闇の世界に灯を点し道をつけていった魯迅の思想を重ね合わせて考えることができる、大変興味深い作品である。情景描写とともに「私」や「閩土」、「楊おばさん」の変化をとらえ、何がそのようにさせたのかを考えることによって語られたことを考えることが可能となる。その際、「私」「閩土」の対照性をとらえるのはもちろんだが、「私」「閩土」「楊おばさん」という人物を設定した効果を考えさせ、統治者、被圧迫者、破産した小市民の姿を浮き彫りにすることで、語られた世界がより一層考えさせられるものになっていることにも注目させたい。また「私」が「故郷」をどのようにとらえているかを読み取ることによって「希望」を語る意味を考えてみたい。生徒同士が交流によって語られたことを考え、交流し合うことで読みの深化を図るとともに、現代社会に生きていく自分自身もどのように未来を切り開くか考えさせたい。

題 目 語られたこと―「故郷」

本時の目標

1. 「故郷」とは何かを考える。
2. 「希望」を語る意味を考える。

本時の評価規準（観点／方法）

1. 描写に即して考えようとしている。（関・読・知/発表，行動観察）
2. 語る意味を考えようとしている。（関・読・知/発表，行動観察）

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
1, 学習課題の把握	・「私」にとっての「故郷」とは何かを考える。	・作品を構造的にとらえさせる。
2, 「故郷」「人物」の思索	・この小説で変化したものを考える。 Ⅰ「故郷」を考える ・「故郷」の変化を考える。 ・「閩土」不在の理由を考える。 Ⅱ「人物」を考える ・「私」「閩土」「楊おばさん」の変化を考える。 ・なぜ「語り手」は「私」「閩土」「楊おばさん」の変化を語ったのか考える。	・「私」から見た言葉の世界であることを意識させる。
3, 意見・考えの交流	・「希望」とは何かを考える。 ・「希望」を語る意味を考える。	・語る意味を考えさせる。
4, まとめ	・語る意味を考え，語られたことを捉え直す。	・語られたことを自分と照らし合わせて考えることを伝える。
備考		

- 1 「私」の望むものは何か(3)
 2 なせ魂をすり減らしたのか
 3 「私」の希望がなぜ手製の偶像なのか
 4 家のいらぬ物は売ってお金を稼ごうと計画していて近所の親戚も断ったのに、なぜ「閨士」に全部あげたのか
 5 なせ「閨士」に言いたいことがたくさん出てきたのに、せき止められたようになつたのか(2)
 6 なせ久しぶりにみた故郷に寂寥を感じるのか
 7 「私」にとつての「故郷」が実際にみた「故郷」と異なつていたのは本当に心境が変わつたせいだけなのか
 8 「私」は故郷をどのように思っているのか
 9 「私」はたれなのか
 10 「私」が故郷を出てから帰るまでに何かあつたのか
 11 「迅」はなぜ知事になれたのか
 12 「迅」は知事なのか(「迅」の家柄は)この国の知事とはなにか(2)
 13 結局「私」は金持ちなのか
 14 なせ家を明け渡すのか(3)
 15 「城内」とあるが、「私」は城に住んでいたのか
 16 何をするために船に乗つたのか
 17 なせ引越すのか(3)
 18 「私」が情景を思い描いている場面が多いが、それぞれどのようなことを表しているのか
 19 「私」は二十年前に故郷に帰り、その変わり果てた様子に言葉を失っているが、
 20 なせそのような変化が起きたのか
 21 p231 13 船が進む風景を詳しく書いているのはなぜか
 22 「私」の故郷は以前はどのような場所だったのか
 23 「閨士」が灰の中に皿を埋めた話は、水生の「家に来い」という発言とどういう関係があるのか
 24 p227 15 「閨士」が突然態度を変えたのはなぜか(4)
 25 「閨士」は灰なごを持って帰れるようにあのような態度をとつたのか
 26 なせ「閨士」は六番目の子を連れてきたのか
 27 なせ「閨士」はうれしさと同時に寂しさも顔に浮かべたのか
 28 心が麻痺する生活とはどんな生活なのか
 29 なせ「閨士」は灰にわんや皿を埋めておいたのか
 30 なせ「私」と「閨士」の間に隔絶ができてしまったのか(4)
 31 「私」や「閨士」が子どもだった頃、二人の親も今の二人のように厚い壁によって隔てられていたのか
 32 「ただ彼の望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りくいだだけだ」
 33 ∴「彼」と「私」が望むものは何か
 34 なせ偶像崇拜なのか
 35 「相変わらずの偶像崇拜」とはどういう意味か
 36 「楊おぼさん」を「小町」から「コンパス」へ変えてしまったものは何か(2)
 37 「楊おぼさん」はどのような考えの人なのか
 38 なせ「楊おぼさん」は「私」に対して偉そうな態度をとるのか(3)
 39 なせ「楊おぼさん」は堂々と人の物を盗むのか(4)
 40 「楊おぼさん」は親戚ではないのになぜ来ているのか

- 39 「楊おぼさん」の必要性は何か
 40 なせ「水生」には銀の首輪をしていないのか
 41 なせ「水生」という名なのか
 42 「水生」と「宏兎」はなぜこんなに仲良くなつているのか
 43 「水生」と「宏兎」はこれからどうなるか
 44 p232 最初の「あれこれ議論の末、」の所の意味
 45 名前の由来は何か
 46 なせ「月」は金色なのか。なぜ「懸っている」という表現なのか
 47 なせ既存の動物ではなく創作の動物を描いたのか(7)
 48 猪とはどんな動物か(3)
 49 この時代の中国の生活スタイルや時代背景はどんなものか(2)
 50 近代中国もこうなのか
 51 人はなぜ変わってしまうのか
 52 最後の段落の意味は何か(2)
 53 「希望」とは何か(2)
 54 作者がいちばん伝えたいことは何か
 55 このお話は本当のお話なのか(2)

実践上の留意点

1. 授業説明

「故郷」は、儒教的環境の中で「お坊ちやま」で育てられた自分の精神風土と闘い続け、未来という闇の世界に灯を点し道をつけていった魯迅の思想を考えることができる、大変興味深い作品である。情景描写とともに「私」や「閩土」、「楊おばさん」の変貌ぶりをとらえ、何がそのようにさせたのかを考えることによって語られたことを考えることが可能となる。その際、「私」「閩土」の対照性をとらえるのはもちろんだが、「私」「閩土」「楊おばさん」という人物を設定した効果を考えさせ、統治者、被圧迫者、破産した小市民の姿を浮き彫りにすることで、語られた世界がより一層考えさせられるものになっていることにも注目させたい。また「私」が「故郷」をどのようにとらえているかを読み取ることによって「希望」を語る意味を考えてみたい。生徒同士が交流によって語られたことを考え、交流し合うことで読みの深化を図るとともに、現代社会に生きていく自分自身もどのように未来を切り開くか考えさせたいと考え、授業を構想した。

2. 研究協議より

・小説を読ませる際、こま切れがちになりがちであるが、今回の授業は変化を軸に構造的に小説をとらえた授業展開であった。全体を読んで、部分に戻るといった進め方はよかったと思うが、初発の問いの生かし方、描写の生かし方、解釈の多様性という面ではまだ可能性があった。

→まだまだ研究を重ねて、よりよい授業の進め方について研鑽を積む必要がある。

・本文の叙述に即した読み取りをしながら構造的な板書で、全体像がとらえやすい工夫がなされていた。しかし、生徒が目的意識をもって読んでいるか、本時はどういう位置づけなのかが生徒に伝わっているかという点では疑問が残った。

→確かに、本時の位置づけを理解しているのとしていないのでは、単元の目的達成度に差が生じるであろう。今後気をつけたい。

・「ルントー」の美しさは絵のように「私」に迫ってくるが、それは「名」という言葉が与えた実体のない存在である。しかし、「希望」も言葉にすぎないものだと片づけていいものか。この小説では実体を与えようとしている。「私」の願いであり、読者に向かって明らかに訴えたものである。

→授業者は「希望」は言葉にすぎないものであり、偶像にすぎないが、それでも「希望」を語るのなぜかを考えるべきだととらえた。しかし解釈の多様性に注目し、授業者の解釈に陥らない授業づくりをすべきであるということは肝に銘じておかねばならない。